

日本デザイン協会 デザイン座談会 1

「デザインの効果を考える」 (抄録)

開催日時 : 平成19年11月30日(金) 午後6時30分より8時30分まで

開催場所 : 東京ミッドタウン・デザインハブ 九州大学・芸術工学東京サイト

東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウンタワー5階

パネラー : 青木 史郎 (JIDPO) デザインプロデュース (財)日本産業デザイン振興会
 大倉 富美雄 (JDA) 建築デザイン 大倉富美雄デザイン事務所
 上条 喬久 (JAGDA) グラフィックデザイン (株)上条スタジオ
 木村 戦太郎 (JDA) プロダクトデザイン 文化女子大学
 コーディネーター : 秋山 修治 (JDA) インテリアデザイン a Design Associate



デザインという言葉が定着して半世紀ほどになりますが、その言葉の持つ範囲は曖昧で、また受け取る人々によってその概念も大きく異なります。そこで、コーディネーター(秋山)が新聞などごく一般に公開されている身近なモノに関することから都市計画に至る様々な情報をもとに、デザインによる効果や試案、データなどをヴィジュアルに提示し、それらを参考に各パネラーがデザインの役割や効果について語って頂きました。

《発言要旨》

デザイン行為は、専門の領域だけで物を見ていると、専門の領域も成長しないし何も見つからないんです。実は、専門の仕事以外に生活者として物を使い、色々なところで関わっていくことが重要だと考えます。デザインという形だし、見えるものではあるものの、見えない仕組みとか発想を転換すること、例えば、フードバンクという発想が出て来ていますが、このようなシステム思考のデザイン行為が世の中で効果をもたらすという風に思います。(上条氏)

今までは、デザインは大きな効果をあげてきた、そのことで大変な経済効果をもたらした。最初にデザイナーがいたわけではない、そういう器用な方々を集めて揺さぶったらデザイナーが出来たという話でしょう、そういう形でデザイナーを作り上げた人達がいる。そういう意味でデザインは最大の効果を上げました。まずそれが1つ、では、次の社会ではどうか、こうは行きません。産業化社会から次の社会を予測する、移行するという仕事をデザインにやって下さい。いわゆるデザインをどこへ使うかというのは、パラダイムシフトに対して使うということではないか。その担い手であるデザイナーにそのことをやってくれないかというところまではっきりしている。ところが出来ません、社会が切り替わったにも関わらずデザイナーの頭が切り替わらない。だから担えない、要求に応えられない、だから効果が出ない。まあ極端に言えばそういう話ですよ。(青木氏)

現代の社会ではデザインがビジネスツールとして使われて来たと言う点がある、昔は物を作る人が自分で考えて物を作っていた。だから大工の棟梁は、作る人であると同時に形も考えるデザイナーでもあったわけだ。これが考える人と作る人の分業化が始まり、分業化したことでより専門的にビジネスの先兵として役立つ能力も身に付いた、しかし、モノ作りの基本を忘れたという側面はあると思う。今企業は、グローバルに競争しなきゃいけない。例えばここにある椅子でも、多機能なワークチェアでは金型代に10億円も掛かる場合がある様です。こういう大きな投資となると経営的判断が優先されて、デザイナーのモラルや理想論は必ずしも通らない。企業もデザイナーも理想を掲げて生きる難しさがある時代だと思う。(木村氏)

デザイナーまたは、デザインに何が出来るのかということだけでも。まず日本人で出来る事という問題であって、次にデザイナーが出来る事という問題がある、更に誰がやるのかという問題があります。その問題の行き着くところは、産業社会が変わってきていて、他のものになって行くところへ来たものだけでも、それを取り扱う部署、あるいは人、あるいはシステム、そういうのがないということではないでしょうか。それをデザイナーが提案すれば良いのだけれども、残念ながら能力が充分ではない。デザイナーは根本的にシステムなり、仕掛けなりというところを提案するということになる、それが中々出来ない、そこをもう一度考える必要がある。(大倉氏)

など、デザインとデザイナーまた、市民・政治・行政などとの問題の共有、連携の在り方などさまざまに語り合われた。また参加者からの活発な意見も寄せられ有益に終了することが出来た。

(文責/秋山修治)

なお、当日の詳細記録について本部事務局へお問い合わせください

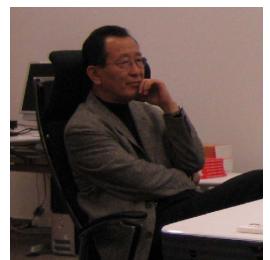
上条氏



青木氏



木村氏



大倉氏

